

# 鯨 研 通 信

第 310 号

1977年 6月

財団法人 日本鯨類協会 鯨類研究所 〒135 東京都江東区越中島1丁目3番1号 電話 東京(642) 2888 (代表)



## 世界に於ける海産哺乳類のリスト

大 村 秀 雄

### はじめに

アメリカの水産庁ともいべき National Marine Fisheries Service から NOAA Technical Report NMFS SSRF-711 として、この標題 (A list of the Marine Mammals of the World) の印刷物が、本年 4 月号として刊行された。筆者は D. W. ライス博士である。彼は以前 IWC の会議の常連で、われわれも顔なじみであるが、1972 年の会議を最後にアメリカ代表団から外されてしまった。その後数年前のラホヤ会議には顔を出していたが、あまり健康そうには見えなかった。

この印刷物を見て、私は彼がまだ健在であることを知ったのである。彼はシャトルの北西漁業センターの海産哺乳類部門に勤務しているが、今回のものは第 3 版である。第 1 版は 1963 年に シュファール博士と共著で、第 2 版は同じく シュファール博士と共著で 1968 年に、いずれも同じタイトルで出版している。つまり今回のものは、海産哺乳類のリストに関する最新版といえることができる。この中で彼は思い切った改訂を行っている。われわれが単に慣行上使っていた名前を、命名規約に基づいて、正しい方向に引き戻したのものもある。

ここに収録されている種類は全部で 116 種で、現存のもの及び近年になって絶滅したもの(ステラー海牛)の総てを網羅している。その内訳は食肉目 36 種(北極グマ、ラッコ、及び鰭脚類 34 種)、海牛目 5 種、ヒゲ鯨目 10 種、歯鯨目 65 種である。ここでは鯨についてだけ簡単に紹介しようと思う。海産哺乳類の専門家は原文を読んで下さることを希望します。

### 目 か 垂 目 か

今までの鯨の分類は、ヒゲ鯨も歯鯨も、それに化石として出てくる原始鯨も、一括して鯨として、分類上の地位は目 Order が与えられていた。つまり鯨目として総括し、これをヒゲ鯨亜目と歯鯨亜目に分けていたのである。ライスは今回この二つの亜目をそれぞれ目に昇格させたのである。はじめにこの項の最後に書いたように、ヒゲ鯨目と歯鯨目としたのである。

その理由はヒゲ鯨と歯鯨は進化の古い時代から、地質年代でいえば少くとも始新世後期から、ヒゲ鯨はヒゲ鯨、歯鯨は歯鯨として、それぞれ別に進化の道を辿った来たからである。年代で言えば今から 4,000 万年前ぐらいから別々であったのである。体の構造も非常に差がある。このような差は多くの科学者が認めていたものであり、それぞれ独立の目とすべき意見も多かった。ライスは“それ故クライネンベルグ(1958)その他の著者の意見に従って独立の目とした”と書いている。それでは原始鯨はどうなるか、という疑問があるが、本書は化石として出てくる鯨は扱っていないから、この点については何も触れていない。現在の知識では、ヒゲ鯨目にも歯鯨目にもつけられないというのが本当であろう。

### ヒゲ鯨目 Order MYSTICETI

ヒゲ鯨目のものは 10 種である。これをコクジラ科、ナガスクジラ科、セミクジラ科の 3 科に分けている。これは今までと変わらない。彼の記載の順に従って説明しよう。

コクジラ科は 1 属 1 種である。

*Eschrichtius robustus* (Lilljeborg, 1861)。

コクジラ。現在は北太平洋特産の鯨であって、アメリカ側とアジア側の 2 つの系群がある。アメリカ側の系群は健在であるが、アジア側の系群が絶滅したか

どうか疑問のあるところである。ライスはアジア側の系群は絶滅に近いとしている。この問題についてはアメリカから発行されている *Journal of Mammalogy* の第58巻2号(1977年3月)に R. L. ブラウネルと釜山水産大学の CHAN-IL CHUN 教授が共著で、朝鮮半島の系群の生存の可能性を報告している。その根拠として戦後韓国で捕獲されたコクジラの数字を示している。それによると Chun 教授は1948年に蔚山で捕獲されたコクジラ6頭を調べている。次の通りである。1月1日37fのメス、1月3日33fのメスと42fのオス、1月5日40fのオス、1月8日42fのオス、1月11日40fのオス。

その後蔚山で捕獲され Chun 教授に報告されたコクジラは、1945—47年0、1948年9頭、1949年4頭、1950年0、1951年7頭、1952年1頭、1953年7頭、1954—1957年?、1958年7頭、1959年7頭、1960年8頭、1961年3頭、1962年0、1963年2頭、1964年3頭、1965年4頭、1966年5頭、1967—1975年0となっている。つまり1948年から1966年までの間に少なくとも67頭のコクジラが捕獲されたと報告している。彼等はさらに1967年から1975年にかけて捕獲の報告のなかったことは、捕獲が皆無であったことを必ずしも意味するものではないと述べている。彼等の結論は、効果的な国際的な保護が近い将来に講ぜられない限り、この系統群は絶滅するということである。

ナガスクジラ科は2属6種である。

*Balaenoptera acutorostrata* Lacépède, 1804.

ミンクジラ。英名は minke whale となっている。IWCの小型鯨部会でも同様である。以前は little piked whale という言葉がよく使われ、日本でもコイワクジラと言はれたが、この言葉は今日ではあまり使われない。これも時の流れであろう。

ミンクジラに関しては3つの亜種が認められるとしている。それは北大西洋の *B. a. acutorostrata*、北太平洋の *B. a. davidsoni*、南半球の *B. a. bonaerensis* である。その論拠は大村(1975)である。この論文は1971—72年漁期に仁洋丸で採集して載いた2頭分のミンクの骨格標本を基にして、これを北太平洋産及び北太平洋産のものと比較して、その差を論じたものである。北大西洋産のものは日本の標本を使ったが、北大西洋産のものは、実物ではなくて他の科学者の論文である。私としてはその可能性は書いたが、まだ結論は出していない。特に腰骨に問題があるので、昨年度共同捕鯨にお願いして標本を採集して載いた。近い将来もう少しはっきりさせることが出来る

と思う。

なおライスはセイロンから得られた標本は、別の亜種 *B. a. thalaha* Deraniyagala, 1963 と報告されているが、それが正しいかどうかは確認が必要であるとしている。

*Balaenoptera cdeni* Anderson, 1878。ニタリクジラ。

これについて特に述べることはないが、強いてアラを捜せば、発表年の1878は1879とすべきものである。これについては私自身苦い経験を持っている。それは1963年にワシントンで第1回鯨研究国際シンポジウムが開かれた時である。私はニタリクジラについて論文を提出したが、引用文献のアンダーソンの論文を、ここに書いてある通り1878年としたのであった。ところが同じシンポジウムに英国の鯨学者パーブスが論文を提出し、彼もこのアンダーソンの論文を引用したが、彼の書いたものには1879年となっていたのである。学問の世界では、この発表年は極めて重大である。これが問題となったのであるが、事實は、アンダーソンの論文、それは部厚い大著であるが、その表紙には1878と印刷してあるが、その繕書の所で、1878年に発刊する予定で表紙にはそう印刷したが、印刷が後れたため、実際に発行されたのは1879年であると明記してあるのである。これに気が付かなかったのである。

この本は鯨研にはないが、科学博物館にはあるから、それを見せて載いたのあるが、最初はそれに気付かなかったのである。鯨学の大家パーブス博士はさすがにそれを見落さなかったのである。私は再び科学博物館に向いて、この事実を確めたのであった。

ところが変な話で、外国人でもこれはよく間違えるらしい。数年前ラホヤでIWCのイワクジラの特設部会があった。これにも私はニタリクジラの論文を出した。IWCで今度印刷されることとなって、その校正刷が私の所に廻って来た。見ると折角私が正しく1879と書いたにも拘らず、それが1878と直されている。これは南阿のベスト博士が直したものと思う。そこで私は赤で1879と訂正し、その理由を手紙で書いてやった。それに対する返事はなく、向うさんも気付いたものと思う。今度はライス宛に同じ手紙を書かなければならない。このような問題は僅か1年の差で済まされる問題ではないのである。

なほライスは英名を Bryde whale としているが Brydes whale とするのが正しいと思う。Bryde とはノルウェイ人の名前で、この場合の y はドイツ語の ü の発音であり、ブリューズとなる。通常はブリューデ

スと言っている。ブルー・ホエール（シロナガスクジラ）と間違いやすい。

*Balaenoptera borealis* Lesson, 1828。イワシクジラ。

イワシクジラについてはライスは2つの亜種を認めている。1は北半球の *B. b. borealis* であって小形で、もう1は南半球の *B. b. schlegellii* Flower, 1865、であって大形である。体長は明らかに異なっているのであるが、形態的の差は必ずしも明らかにされていないものと思う。ライスは唯単に smaller one と larger one としているに過ぎない。実はこのような点が鯨研究の落ちこぼしである。とっくの昔にわかっているいい筈のものが、本当はわかっているないのである。最近の生物学は分類学を重視しない。特に鯨については、そんなものは19世紀の学問だなどと考える人が多い。しかしながら分類上の地位がはっきりして、始めて環境の問題にも入り得る筈のものである。アメリカのマダロの巻網の問題は、大問題となったが、そのおかげでと言ってはおかしいが、スジイルカ類の分類が明確になりつつある。この意味でW. F. ベリンの功績は大きい。

*Balaenoptera physalus* (Linnaeus, 1758)。ナガスクジラ。

ナガスクジラについても2つの亜種を認めている。1つは北半球の *B. p. physalus* で小形で、他は南半球の *B. p. quoyi* (Fischer, 1829) で大形である。これもライスは単に smaller と larger という言葉を使っているだけで、他の問題には触れていない。事情はイワシクジラの場合と全く同じである。

*Balaenoptera musculus* (Linnaeus, 1758)。シロナガスクジラ。

ライスはシロナガスについては3つの亜種が認められるとしている。それは北大西洋と北太平洋産の *B. m. musculus* と夏期南氷洋に回遊する *B. m. intermedia* Burmeister, 1871 (この方が前者より大型)、それにビグミイ・シロナガス *B. m. brevicauda* Ichihara, 1966 としている。ビグミイシロナガスクジラについては現東海大学海洋学部の市原忠義教授が詳細な研究をされたのであるが、亜種名の命名者については議論のある所である。

1963年にワシントンで第1回鯨研究国際シンポジウムが開かれ、市原教授はこのシンポジウムに論文を提出し、その中でこの亜種名を提案したのであった。しかしながらこの論文が印刷されて出版されたのは1966年のことである。ところがこの間にソ連のゼムスキーと

ポローニンがノルウェイ捕鯨雑誌に、市原教授の説に賛成し、その学名をそのまま使ったのである。尤もこれにはまだ裏話があるのであるが、ここでそれにまで触れる必要はないものと思う。そこで学名は同じ学名であっても、その命名者は市原かゼムスキーとポローニンかという問題がある。オランダの分類学者ファン・ブライは Zemsky and Boronin 1964 としているが、ライスは敢て上記のように Ichihara, 1966 としているのである。彼によれば、この名前に関する最初の、確実な根拠のある論文は Ichihara 1966 である。彼によればさらに、チリーとペルー沖のシロナガス及び印度洋北部のシロナガスの分類学上の地位はまだ明らかにされていない。

このようにビグミイ・シロナガスが普通のシロナガスクジラの亜種であることは世界の鯨学者が認めているのであるが、そうではないような文章に最近出会った。これは科学論文ではないから無視してもよいのであるかも知れないが、一般の人の誤解を招く惧もあるので、敢てここに甚く次第である。これは朝日ジャーナルの1977年7月8日号に小原秀雄さんが「海洋環境を無視した捕鯨戦略の破産」と題した文章の中で次のように書いておられるからである。

コビトシロナガスクジラは、今でも外国の動物学者には認めぬ人も多いが、もちろんそれで当否は定められないし、その研究をした大村博士（現在、日本捕鯨協会理事長）は、もちろん学術的立場から仕事をなさったのであるが、こうした不快感を持たれてしまったのである。

この文章は誤りではないかも知れない。外国の動物学者の数は多いし、その人たちが総て鯨を理解しているとは限らないし、鯨の論文を読んでいるかわけでもない。ただ鯨の研究者、特に鯨研の人間としては文句を言いたい筋があるのである。ビグミイ・シロナガスを精力的に研究したのは、前記の通り市原教授（当時鯨研所員）であり、これは鯨関係者ならば周知の事実であるが、どうして私の名前を持ち出したのか、理解に苦しむ所である。ただ私も関係していることは事実である。それは当時の研究は外部形態に関するものが主体であったから、骨格も調べる必要を感じて、1966年に水産庁から特別許可を載いて、ビグミイ・シロナガスの完全な骨格1頭分を採取した。この骨格標本は東海大学の海洋科学館（清水市）に現在展示されている。

この骨格を調べて大村、市原、粕谷の共著で論文を発表した。その結論はビグミイ・シロナガスの亜種と

しての証拠を追加したものであった。この論文は鯨研英文報告22号(1970年)に発表した。

ここで触れなければならないのが、スモール教授の「シロナガスクジラ」と題する著書である。この本の中で彼はビグミイ・シロナガスの存在を認めていない。この本はアメリカで広く読まれたものと思われるから、彼の説に賛成する者も多いと思うし、その中には動物学者もいるであろう。小原さんもスモールのことを引用しておられるが、この本の中には、鯨類研究所の悪口が書いてある。それは、ビグミイ・シロナガスの論文を書いた科学者は鯨研の所属である。奇妙なことにこれらの論文は、鯨研の報告には一つも出ていなくて、総て外国の雑誌に発表されている。おそらく鯨研の科学者は、その使用主である捕鯨業界の指示の下に、ビグミイ・シロナガスの存在を外国の科学者又は役人に信じ込ませようと努力したのであろう。成功すれば、シロナガスの捕獲を継続する理由がたち、失敗してもそれは言い訳となる。

小原さんもこの本を読んでおられると思うし、それ故に私の名前の下に括弧して現在、日本捕鯨協会理事長とつけ加えられたものと思うが、私と市原、粕谷両氏との共著の論文は、スモールの本の出版された1971年より1年前の1970年に、しかも鯨研の英文報告に堂々と発表したものである。これでスモールの論拠が、いかに日本にとって悪意に満ちたものであるかが理解されよう。アメリカの動物学者でも、鯨を真面目に研究している人たちは、スモールの言を信用しているとは考えられない。

ナガスクジラ科のもう一つの属ザトウクジラ属は1種である。

*Megaptera novaeangliae* (Borowski, 1781).  
ザトウクジラ。

ここで述べていることは、地理的分布によって、ザトウクジラは体長の差が殆んどないことである。彼は亜種を認めていないが、系統群の間には、体色の出現頻度に差があるとしている。これは俗にいうシロザトウ、クロザトウのことであろうが、北大西洋のものは立羽が白いのが特徴である。

次に問題になるのがセミクジラ科の属の名前である。今まで普通に使われていた分類法によればセミクジラ科 BALAENIDAE は、セミクジラ属 *Eubalaena* グリーンランドクジラ属 *Balaena*、コセミクジラ属 *Caperea* の3属に分けるのが普通であったが、今回ライスはこれを2属にして *Eubalaena* を廃止した。彼によれば、今日までにグリーンランドクジラとセミク

ジラを細かに比較検討したのは Eschricht と Reinhardt (1861) だけであるが、彼等はこの両者の間に属としての差を認めていない。グレイ (1864) は *Eubalaena* 属をたてたが、この属名はその後他の科学者によって無視されて来た。それを Allen (1908) が復活させたのである。動物分類史上グレイとアレンの2人は最も著名な属分割論者である。この2種の間の差は、ナカスクジラ科のもの種と種との間の差よりも大きくはない。

ライスの説明は以上の通りであるが、私もかつてこの点について疑問を持ったことがある。それはセミクジラについて調べていた時、アレンの論文を読んだが、グリーンクジラ属とセミクジラ属の差は、前者では頭が大きくて体長のほぼ3分の1を占めており、かつ肥っていること、頭蓋骨が大きくアーチ状に曲がっていること、その質も緻密であることである。セミクジラでは頭長は体長の約4分の1で、ヒゲも短かく毛も粗いというのであった。頭の大きさはそうかなと思ったが、ヒゲについてはどこに差があるのか謎に疑問であった。ただ当時はグリーンランドクジラの標本を見る機会に恵まれなかったから、その当時の慣行にしたがって、セミクジラの属名を *Eubalaena* としたまでである。したがって私はライスの説に賛成である。

*Balaena glacialis* Müller, 1776. セミクジラ。

北大西洋、北太平洋及び南半球の温帯域に棲んでいる。南半球のものは亜種 *B. g. australis* Desmoulins, 1822 として北大西洋の *B. g. glacialis* と区別することができる。北太平洋のものは、明らかに、北大西洋のものと区別できない。このようにライスは北半球と南半球との間に亜種としての差があるとしている。

*Balaena mysticetus* Linnaeus, 1758. グリーンランドクジラ。

彼は地理的に分離された次の4の系統群のあることを認めている。1) スピッツベルゲン西岸から東グリーンランド 2) デーヴィス海峡、バフィン湾、ジェームス湾及びそれに近接した水域 3) ベーリング海、チュクチ海、ビューフォート海 4) オホーツク海。アラスカ・エスキモーは2つの型を認めている。それは大型の *kairalik* 即ち本当のグリーンランドクジラと小型の *ingotok* (19世紀のアメリカ捕鯨業者によって *Poggy* と呼ばれていたもの) である。*ingotok* は多分若いグリーンランドクジラであろう。

CAPEREA 属は次の1種である。

*Caperea marginata* (Gray, 1846)。コセミクジラ。

南大洋の温暖水域に分布。今までの報告は主としてニュージーランド、オーストラリア、南米、フォークランド島及び南アフリカに漂着したものが主である。

## 歯鯨目 Order ODONTOCETI

歯鯨目の分類については、新しい科を設けるべきであるとする意見がいろいろ出されているが、ライスはまだ研究が不十分であるとして、伝統的な 5 科を採用している。IWC の小型鯨部会でも、種の数や種名について検討を行なったが、ライスが今回採用したものは、種の数は IWC と全く同じであり、学名も同じであるが、若干異なっているものもある。歯鯨目の全部について記載する必要はないと思うから、今までの慣行と異なっているもの及び IWC と異なっているものについて、以下に述べることにする。次の通りである。

*Physeter macrocephalus* Linnaeus, 1758。マッコウクジラ。

マッコウクジラの学名は今までの慣行では *Physeter catodon* Linnaeus, 1758 が使われていた。ただしその前の時代には、今回ライスが採用した *P. macrocephalus* が使われていた。したがって今回は 10 何年か前に逆戻りすることとなる。その理由に関しては Husson and Holthuis 1974 を見よとなっている。種名は共に Linnaeus が 1758 年に命名したものであり、われわれにとっては、どちらか先に命名されたか不明であるが、Husson と Holthuis は原著について検討し、この結論に達したものと思う。したがって厄介ではあるが、この長い学名に戻るのが本当であろう。

*Platanista minor* Owen, 1853。インダスカワイルカ。

IWC のリストでは *P. indi* Blyth, 1859 となっているが、*P. minor* の方に優先権があるとだけ書いてある。インダス河のイルカもガンジス河のイルカも今までは同一種とされ学名は *Platanista gangetica* (Roxburgh, 1801) が使われていた。これを別種であるとしたのはスイスの Pilleri と Gühr (1971) であるが、彼等はその論文の中で *P. indi* を使ったのである。IWC はこれをそのまま使ったものと思うが、この点についてはオランダの van Bree が既に 1976 年に *P. indi* は *P. minor* のシノニムであることを発表している。したがってここではこれを引用した形

で述べた方が良かったものと思う。

*Indopacetus pacificus* (Longman, 1926)

この動物はアカボウクジラ科に属しているが、今までオーストラリアとソマリヤに漂着した標本が 2 頭あるだけである。IWC ではこれをメソプロドン属 Genus MESOPLODON に入れているが、ライスはインドハセタス属 Genus INDOPACETUS に入れているわけである。これは Moore, 1968 に拠ったわけであるが、IWC ではこれを認めなかったのである。属名は異なっているが種名は同じである。したがってメソプロドン属の種の数は IWC では 12 種であるが、ライスのリストでは 11 種となっている。

もう一つの相違点はスジイルカ *Stenella* 属である。この属のものでハンナガイルカ *S. longirostris* (英名 Spinner) とスジイルカ *S. coeruleoalba* は両者共通であるが IWC の表では *S. attenuata*, *S. dubia*, *S. frontalis*, *S. plagiodon* の 4 種の名前を記載し、但しマダライルカ (Spotted dolphins) 2 種としている。つまりマダライルカに該当するものに 4 種の学名が与えられているが、これを整理して行けば 2 種となるが、その 2 種としてどの学名を採用するか決定しなかったのである。これに対してライスは *S. attenuata* と *S. plagiodon* を採用している。後者は大西洋のマダライルカであるが、問題は前者であり、ベリンは中部及び東部太平洋で 3 つの亜種を認めている。ライスもマダライルカについては、最近の多くの著者によって使われている名前を、暫定的に使用した、と書いている。

以上の通りであって、これ以外は、今回のライスのリストは IWC の分類と全く同じである。

## 普通名(英名)

IWC では各種類ごとに普通名も 1 種にしぼって、これを使うことを勧告している。しかしながらライスはこれに同調していない。同じ名前もあるが別のものもあるし、2 つ以上の名前を記載したものもある。彼のリストでは参考までに記載したという程度であろう。彼によれば普通名を統一する意図はなく、かつまたそれは時期尚早であるとしている。彼は研究者は実地についてもっと記録し、必要があればさらに適切な名前を考えるべきことを希望している。大型鯨については、もはやその必要はないが、問題は小型鯨である。国によって又は地方によって、古くから伝えられている名前があるから、それを尊重するのが当然のことであろう。例としてヨウスコウカワイルカ *Lipotes*

*veixillifer* Miller, 1918 について述べよう。このイルカの英名を IWC リストでは white flag dolphin としているが、ライスはこれを排して *pei c'hi; whitefin dolphin* としている。white flag dolphin という名称は、このイルカに学名をつけたミラーが使用したものであるが、ライスは西脇さんからの私信として、これは漢字の誤訳に基づいたものであるとしている。

最近中国から動物学报第23巻第1期が鯨研に送られて来た。この中にこのカワイルカの分布に関する論文が掲載されている。本文は中国語であるが、それに外文摘要として短かい英文がついている。それによればこのイルカは2,000年も前から知られていて、Ji 又は Baiji と称されている。Baijiの方が普通のようである。英文の標題も *Studies on the distribution of Baiji, Lipotes veixillifer MILLER* となっている。

## せ た し あ

待望のくろしお文化第7号が最近刊行された。これは捕鯨特集(下)である。毎度のことながら、よくも調べたり、よくも集めたりと驚く。本誌は千葉県勝浦市の矢代嘉春さんの個人編集であるが、全篇を通じて矢代さんの、日本捕鯨史に関する執念のようなものが感じられ、胸を打つものがある。

今までは日本に伝わるポンプランスの正体もはっきりしなかったが、アメリカ捕鯨におけると同様、銃から打ち出すものと、手投げ銃に仕込んで鯨に投げつけるものの2通りが伝わっていたことも明瞭となった。平戸の森信義老がポンプランス銃を構えた写真3葉が掲載されているが、この構えには一種の鬼気さえ感じられる。さすがに若い時鍛えた撃ち方だけあって、一寸の隙もない。美事という外はなく、普通人の真以は到底できない。

グリーナー砲については、遂に出所をつきとめ、これで総てが明瞭となった。ただグリーナー砲という名前の起源があまりはっきりしない。三須五郎氏所蔵のものはノルウェイから輸入したもので、そのメーカーも今号で判明した。矢代さんの依頼により、ノルウェイに問い合わせの手紙を出したのは私であるが、その

したがってライスの *pei c'hi* も正しくはない。Baiji と書くべきである。さらにこの論文の中では white flag dolphin という言葉もライスの *whitefin dolphin* も出てこない。外国の人間が勝手な英名をつけるのも変な話である。こんな名前はやめて、中国人の使っている Baiji だけにするのが正しいやり方と思う。

それでは中国字ではどう書くか。彼らの論文(3名の共著)の中に「白鯨豚的古名白鯨(音既 ji)、又称白鯨」とあるから古名は鯨又は白鯨であるが、彼等はこれに豚をつけて白鯨豚としているのである。しかしながら上記の英語の標題に見るように、これも Baiji である。中国字の標題は白鯨豚の分布調査である。

このような問題もあるから、ライスの普通名統一時期尙早論は正しいものと思う。

回答は今号に出ている通りである。ただ私としては、ノルウェイでなんと呼んでいたのか、その名称もゆねたのであったが、これについての回答はなかった。

アメリカでは一般にグリーナー砲と呼ばれていたが、大英百科事典によると、ウィリアム・グリーナー(1806—1869)は著名な銃砲製作者であり、多くの発明も行なっている。その息子と共に、今日の銃砲の元祖の存在であったようである。彼は工場をニュー・キャッスルに設けたとあるから、年代的にも一致するし、ここで第1号砲が製作されたと考えるのが妥当のようである。この名前の本家は英国であり、それがノルウェイに渡り、アメリカにも渡ったのであろう。

本号には多くの方々から寄稿しておられる。いずれも面白くかつ有用であり重要である。私の名前も出ているが、これは名前の下に(訳)と入るべきものが脱落したものである。横字をタテに直しただけのものである。

本号の定価は郵送料込みで850円で、郵券にてても可と記してある。発行所は、〒299-52 千葉県勝浦市串浜、黒沙資料館である。捕鯨関係者及び漁村文化に関心を持たれる方の一読をおすすめる(大村)。